羅振玉と明治末葉の東京

菅野智明

一　敦煌学前夜の東京 ―はじめに―

内藤湖南が一九〇九（明治四二・宣統元）年一一月に発表した「敦煌石室の発見物」と「敦煌発掘の古書」の二報[1]は、爾来日本における敦煌学の嚆矢と目されている[2]。ただしこの二報は、多くを羅振玉が提供した情報・資料に依拠していた。「敦煌発見の古書」では、その内容が、羅の『敦煌石室書目及発見之原始』及び『莫高窟石室秘録』（ともに誦芬室刊）という新刊の二著[3]や、羅から提供を受けた一部文書の写真に基づくことを有り体に述べている。これらの提供がなかったならば、内藤をはじめ時の京都帝国大の教授陣が、同年内に敦煌文書展を開催するほど[4]、急速な研究の進展は望めなかったはずであり、その意味で、日本に敦煌学の曙光を放った羅の功績は改めて評価されなければならない。

こうした経緯を眺めると、羅の敦煌文書に関する情報・資料提供は、あたかも内藤たち京都の面々のために、ピンポイントで施されたかの如き印象を覚える。まして、羅と内藤がこの時点で既に親交を深めていた事実[5]や、翌年の内藤たち京都帝大教員の北京調査における羅の便宜[6]、更には、革命を機とした内藤による羅の京都招聘[7]などの事実も勘案すれば、羅と内藤・京都との結び付きは勢い絶対視されてしまう。だが、実のところ羅の情報・資料提供は、京都の面々だけにとどまらなかった。現在、国立国会図書館が所蔵する『莫高窟石室秘録』の表紙には「己酉十一月 羅叔言所贈 古柏艸堂」との書き付けが認められる[8]。「己酉」は一九〇九年。「古柏艸堂」は、時に東京を拠点に活動していた美術史家・平子尚の室号である[9]。羅は、内藤のみならず平子にも、刊行直後の同著を寄贈していた。それには相応の理由がある。実は同年の夏、羅は官命で訪日し、主と

して東京に滞在しつつ、同地の中国学者や中国文物の鑑蔵家と広く交わる中で、平子とも知り合っていたのである。この訪日の模様は、他ならぬ羅の日記「扶桑再遊記」（以下「日記」と略す）[10]から克明に辿ることができる。

小論は、この「日記」を手がかりとし、羅が東京で交わった中国学者・鑑蔵家・出版人・書法篆刻家等（彼等のネットワークを、ここでは便宜的に「中国文化界」と称する）を分析するとともに、帰国直後の羅の活動を跡づけることによって、羅が京都とは別に、東京と固有の結び付きを強めようとしていた点を導こうとするものである。更に、この前後の内藤の働きかけが、結果として羅と東京の中国文化界との間に楔を打つ形になったことについても、推測を巡らしたい。「日記」は羅の年譜にその一部が引かれる[11]も、そこに描かれる中国文化界を分析する試みは未だ着手されてはいない。また、羅と日本との交流は、京都に避居して以降の事跡が中心的に扱われ[12]、東京との関連に注目することは稀だったように思われる。それへの着眼は、羅と京都の関係についても、新たな意味づけを可能としよう。

二　訪日の梗概

まず、羅の訪日中の足取りと、交友の軌跡を整理しておきたい。

一九〇九年、羅は京師大学堂の農科大学監督に就任し、その職務の一環として日本の農学を視察することになった。官命による日本視察は二度目である[13]。「日記」は、この年の六月二三日[14]に訪日のため天津へ赴くところから始まり、訪日の後、一時滞在の上海から帰路に着く八月二六日で終わっている。実際の訪日期間は、七月三日から八月七日までの一月余りである。七月三日、神戸に着いた羅は、翌四日に内藤湖南、富岡謙三、桑原騭蔵、狩野直喜といった京都大の面々に会い、五日には、同大総長・菊池大麓、同大文科大学長・松本文三郎とも対面を果たした。六日に上京、七日にかけて松山堂、琳瑯閣、文行堂などの唐本商を巡り、九日には文求堂・田中慶太郎を訪ねている。

本務の農学視察は十日以降に始まる。一一日に札幌に到着、一六日まで東北帝国大学農科大学や真駒内種畜場等を視察し、一八日には東京へ戻り、二〇・二一日にかけて駒場の帝国大学農科大学に足を運んだ。その後、二二日から八月五日までは、東京の主要な中国文化界人士との交誼が展開する。以下、「日記」から読み取れる羅が直接対面を果たした人士について箇条的に列記するが、当該の日付は［　］で記し、各人士が同伴の場合は「—」で結び、別個の

対面の場合は「、」で区切って示すことにする。なお、関連する特記事項は「→」で付加した。

［二二］河井仙郎―樋口勇夫→近々開催の吉金文字会への勧誘［二三］田中慶太郎―平子尚［二四］田中慶太郎―日下部鳴鶴―高田忠周―後藤朝太郎→説文会［二五］服部宇之吉、日下部鳴鶴［二六］河井仙郎―三井源右衛門［二七］野上一郎、七條愷［二八］岡田良平、田中慶太郎―平子尚［二九］日下部鳴鶴、河井仙郎―七條愷、島田翰―小林新六［三〇］田中慶太郎、河井仙郎、島田翰［三一］林泰輔、岡田良平［八月二］島田翰―福井繁→宮内省図書寮［三］河井仙郎［四］中島某―島田翰―田中慶太郎、青柳篤恒、河井仙郎―徳富猪一郎［五］青柳篤恒―市島謙吉→早稲田大学図書館、田中慶太郎―島田翰―河井仙郎

帰国前日となる八月六日は、再度京都に立ち寄り、狩野直喜に会っているが[15]、それにしても以上に見る如く、この旅程の大半は東京の中国文化界との縁を深めることに費やされている。

三　交流を支えるネットワーク

前節で掲げた人士を一瞥するなら、河井仙郎と田中慶太郎の頻見は、特に注目されるところである。京都出身の篆刻家である河井は、この折までに拠点を東京に移し、後述の説文会でも活躍していた[16]。同会員で朝日新聞社の樋口勇夫や、『国民新聞』を創刊し、漢籍にも精通した徳富猪一郎[17]、そして希代の漢籍収蔵家で河井の庇護者でもあった三井源右衛門など、いずれも河井の仲介で羅が対面したようである。同様に、京都から東京へ進出してきて間もない田中[18]も、平子を羅に引き合わせたのみならず、河井が吉金文字会（説文会と合同開催[19]）へ誘うよりも早く、七月九日の段階で羅に説文会を紹介し、羅を諸名士に引き合わせるべく積極的に働きかけている。実は、河井と田中の両人は、一九〇〇年に上海へ同行し、羅と対面を果たしており、旧知の間柄であった[20]。その直後、始めて訪日した羅に河井が同伴し、献身的に各地を巡ったことも肯ける[21]。対して田中は、この時期頻繁に大陸で直接漢籍を購い、国内の販路を広げていた[22]。そうした彼の人脈と語学力（「日記」にも説文会では田中が通訳したとある）は、訪日の羅に対する絶大な支援であったに違いない。

「日記」の後半に入ると、島田翰の名が目につく。既に彼は漢籍にかかる専著を上梓する傍ら、陸氏皕宋楼旧蔵漢籍の請来にも尽力し、斯界に名を上げていた[23]。彼が仲介し

た人士で特筆されるのは、宮内省図書寮の福井繁である。「日記」では、島田の案内で同寮を訪れた羅が、福井の配慮で稀覯な宋版や宋拓を閲した模様を綴っている。[24] この日、島田は同寮のみならず、田中光顕や早稲田大学図書館、南葵文庫、岩崎文庫、金沢文庫等、関東一円の主要な漢籍収蔵者について紹介しているが、「日記」から窺える漢籍収蔵にかかる情報提供では、上記の平子も劣ってはいない。平子は、上掲の田中光顕や金沢文庫他、古渡の著名古抄本の所蔵先について、具に紹介している。加えて、ドイツで刊行された且渠安周碑の考証書について羅に意見を求めたり、[25] 自著『補校上宮聖徳法王帝説証注』を示しつつ、それへの題簽揮毫を求めるなど、話は尽きなかった。以上のような経緯が与ってであろう、帰国の途についた八月八日、羅が真っ先に礼状を差し出したのは、田中、河井、平子、島田、福井の五名であった。

この他、羅が奉職する京師大学堂に同年春まで招聘されていた服部宇之吉[26]や、『鉄雲蔵亀』の羅の序を敷衍し持論を公表しようとしていた林泰輔[27]、そして青柳篤恒・市島謙吉といった早稲田大の教授陣[28]との対面も興味深いが、この訪日における交流で一番のハイライトとなるのは、やはり説文会への参加となろう。同会には、羅へ参加を誘った河井や樋口も当然居合わせたはずであり、同会の主要メンバーである高田忠周の著書を発行していた金属版印刷合資会社（西東書房）社長・七條も加わっていた可能性が高い。この日の「日記」では、高田の『説文段注疏証』という大部な稿本[29]に羅は圧倒され、「其の著書の勇、我が国其の比無し、愧づべきなり」と慨嘆するが、それと同時に、説文研究の資料を殷周金文に遡及して求めようとする高田の姿勢[30]にも、時に甲骨や金文を注視していた羅は、深い共感を得たと推測される。この点が、次節で述べる羅の所蔵金文拓の影印刊行と直接結び付くようである。

ところで、高田とともに同会の中核を担った後藤朝太郎は、この直後に『文字の研究』（成美堂 一九一〇年二月）を刊行、そこには「支那文字音韻言語に関する参考資料」というリストが添えられ、後藤が直接交わった漢籍収蔵家が列記される。それら各家を通覧すると、高田、日下部、河井、服部、林、三井、平子といった今般の「日記」に掲げられる大半の人士が確認でき、更には早稲田大学図書館や、島田が紹介する南葵文庫、岩崎文庫の名も認められる。少なくとも後藤は、これら各家の収蔵漢籍を披閲できる立場にあったと言え、延いては、各家同士の相互利用も旺盛であったことが強く示唆される。東京の中国文化界には、

元来こうしたネットワークが形成されていたのである。羅がその主要な面々と短期間で一通り効率よく訂交が叶った背景には、田中や河井の積極的な仲介もさることながら、中国文化界自体の濃密なネットワークが介在する点を指摘する必要がある。

四　帰国後の交流

羅と東京の中国文化界との交わりは、彼の帰国後も暫時続いた。その事跡として特筆されるのは、七條のもとでの影印刊行物である。上述のように、七條は高田の主要著書を刊行する一方、まさに羅が訪日した一九〇九年頃から「書道振興会」を発行所として和漢の古名跡を精力的に影印刊行していた。その後一九一一年には、説文会の主要メンバーや、大阪の博文堂とともに法書会を設立、同会発行の『書苑』の創刊に尽力している。[31] 彼が開発した「七條式写真金属版印刷」は、それを実見した羅が「精絶」と驚嘆するほどで（「日記」七月二七日条）、帰国後の羅は、七條を介して以下のような影印本を刊行していった。

（一）『唐風楼蔵三代吉金文字』（田中慶太郎　一九〇九年一二月）

序跋なし。羅の所蔵金文拓二四種について、田中を編集兼発行者、印刷所を七條の金属版印刷合資会社の名義で影印した図録集である。編者を田中とするように、この著（以下『三代』と略す）は田中の主導で成ったようだ。田中の文求堂が刊行した同社の書目には、同著に対し格別の解題が掲載され、[32] その一節には次ようにある。

清ノ篤学羅先生、金石ニ精シク常ニ三代文字研究資料ノ天下ニ流布セザルヲ憂ヘ、ソノ平素蒐輯セル所ノ吉金文字拓本ヲ複製シテ大ニ世ノ学者ヲ益セントス。弊堂則請フテコレヲ金属版に印シ…

これによれば、羅も所蔵拓の公刊による「世ノ学者」への裨益を望んでおり、田中が率先してその実現に邁進したことになる。「世ノ学者」については、羅・田中両人とも共通して、更にコアとなる対象を想定していたであろう。即ち、それが説文会の面々である。殷周金文を文字研究資料として重視するのは、上述した高田の姿勢そのものであり、七條による印刷や、日下部が題簽を揮毫することも、説文会との深い縁を示唆している。

『三代』と説文会との結び付きを示す証左として、上掲『書苑』第三号（法書会　一九一二年一月）における樋口の『三代』紹介記事に触れておきたい。樋口は、同誌に克鼎

銘を掲載するに及び、その解題で『三代』所載の克鼎の拓に言及しつつ、同誌掲載拓を「浄鑿を加へたる後の拓本ならむか」などと推測している。『三代』は、金文拓の比較材料として、確かに貢献していたのである。更に同誌の克鼎銘の釈文は、高田の直筆版が採用され、注目すべきことに、その末尾には「宣統紀元六月上虞羅振玉拝読」と訪日中の羅の肉筆款記も添えられている。これらに鑑みると、『三代』の刊行は、やはり羅の説文会参加に端を発するもので、同会への裨益が主眼に置かれていたと見てよい。

それにしても、「第一輯共二十四葉」と明記されるこの『三代』に、続輯が刊行された事跡は確認できない。それも与ってか、羅の著述目録[33]にも『三代』は未掲であり、従来この影印本は、上記の樋口の紹介を除けば、殆ど着目されてこなかった。続輯の頓挫は、羅と東京との行く末を象徴するように映る。この点については次節で改めて論じたい。

（二）『唐拓転印唐太宗温泉銘帖』（書道振興会　一九一〇年一一月）

印刷所を金属版印刷合資会社、発兌所を西東書房とする影印本で、実質的に七條一人で刊行に至らしめた一著と言える。序はないが、巻末に羅の宣統元年一一月の肉筆跋も影印附載する。この温泉銘拓本は、先述した敦煌発見文書の一つであり、つまりこの影印本の版下は、羅のもとで撮影された写真なのである。この版下写真は、『三代』刊行の実績からすれば、羅が七條に直接提供した可能性が高い。或いは、羅の帰国直後の一九〇九年秋、北京に赴いていた田中[33]を介しての入手であったとも考えられる。

上述のように、この頃七條は古名跡の影印刊行に本格的に着手していた。温泉銘が王羲之書法を正統的に継承した名跡であることは、先述の「敦煌発見の古書」において内藤が説くとおりで[35]、七條も温泉銘の卓越した書法を認め、書家たちの需要を当然見通していたと察せられる[36]。

ただし七條は、内藤に届いた同拓の写真を借用してはいまい。この折、内藤は大阪で古書画の影印出版に着手した博文堂を支援し、その刊行計画にも助言を与えていた[37]。もし、内藤が敦煌本温泉銘の影印に積極的であったなら、羅提供の自蔵写真は、博文堂の出版を優先させたはずである。しかし、一九一〇年時点で内藤の影響下に博文堂が影印刊行した中国書跡は、国内伝存の蘭亭序や古渡の抄本が中心となり[38]、羅から提供された敦煌文書の写真は、同社からの公刊を見なかった[39]。書法的側面を視野に入れた敦煌文書の

影印刊行は、結果として七條が、羅の助力のもとに先鞭を着けることになったのである。

（三）『宋拓転印東坡楷書宸奎閣碑帖』（書道振興会一九一一年四月）

上記の（一）（二）とは異なり、東京から羅に向けての資料提供を裏付ける影印本である。（二）と同様、七條によって刊行された。序跋なし。ただし、この著の広告[40]における解題には、以下のような一節がある。

淳祐元年、沙門聖一国師、仏頂光明塔碑と共に齎らし帰れる所にして、今は則ち宮内省図書寮の尚蔵に帰し、天下の一品なり。客歳、清国の金石学者、羅振玉氏の来朝するや、請ひて之を観て、垂涎措く能はず。我が七條式写真版に附して、北京に送致せんことを約して帰れり。残本若干あり、以て同好の士に須たんとす。

ここにおいて羅が「請ひて之を観」たというのは、福井繁の配慮で宮内省図書寮蔵本の披閲が叶ったことを指す。七條は羅の求めに応じ、同拓を日本での正式な出版に先駆けて影印し、羅へ提供していた。そのことは、「宣統紀元、事を以て日本東京へ遊び、書を彼の宮内省図書寮に観、此の碑の宋拓整本を見るを得たり…其の館臣の福井氏繁に請ひて撮影して以て帰す」という羅の言からも裏付けられる。[40]

因みに七條は、上記の宸奎閣碑拓に加え、同寮所蔵の仏頂光明塔碑拓も影印刊行している。こちらの解題には、羅からの影印の要請が明言されていないが、宸奎閣碑拓の影印本とともに、セットで羅へ提供されていたと推測される。

五　京都への傾斜 ―おわりに―

京都に避居していた羅が、文物資料の影印刊行に精力的であったことは、既に指摘されるとおりである。[42]かつての拙文でも、羅の文物資料の影印には、清末に形成された新しい収蔵観・出版観が反映されていることを示した。[43]そうした収蔵観・出版観に基づく羅の実践は、確かに京都避居後に本格化することになる。だが小論に見る如く、羅は京都避居に先立ち、東京の主要な中国文化界人士と短期間に相次いで交わることによって、それに因む文物資料を七條のもとで影印するまでに至っていた。それは、京都での実践の萌芽と呼ぶに相応しく、羅と中国文化界との交流が、かかる萌芽を促す豊かな土壌となったことは特筆されねばならない。

先述のように、羅の訪日の翌年（一九一〇）、内藤は京都大の一行とともに北京の羅を訪れ、更にその翌年には、

羅の眷属を含めた京都避居を提案する。内藤の羅に対する積極的な接近により、羅と東京の中国文化界とは相対的に疎遠になってゆく。先掲の『三代』の続輯頓挫は、その象徴的一例と捉えることが可能であり、時の羅が、敦煌文書や殷墟甲骨の整理・研究に多大な労力を費やしたことからしても、『三代』続輯は先送りされたと見てよい。

ただ、ここで勘案したいのは、内藤と東京、特に説文会との関係である。一九一〇年三月二五日付『東京朝日新聞』の無名氏記事（筆者は樋口勇夫）「漢字雑話（四十七）」では、京大に説文研究会があるとの虚偽が報じられ、架空の同会の不備に対し、内藤までが非難されていた。激憤した内藤は、直ちに稲葉岩吉へ宛の書簡[44]で、この記事を「後藤朝太郎氏の筆」と推測し、「京都にはソンナ時代後れの会合などは無之…近頃の化物は箱根以東の名物のやうだと御伝下され度候」などと怒りを露わにしている。[45]

その後、樋口は「漢字雑話」連載記事の単著化（郁文舎同年一〇月刊）に及び、内藤に序の寄稿を請うが、これに応じ内藤が寄せた序（同年九月）は、上記の経緯もあってか実に辛辣である。

海外の邦に在りて、吉金の精なる者已に覯ひ易からず、僅かに拓本を撫摩して以て金文を鈎稽せむと欲す、豈至つて難からずや。我邦の説文を講ずる者已に声韻に於て解悟する所少し、輒ち字形を談じて以て其奇僻の説を縦にす。

内藤は、同会の字形研究を「僅かに拓本を撫摩」するのみと指弾し、「奇僻」を招く根拠の薄弱を難ずるのであった。

この際、内藤は『三代』を閲していたのだろうか。敦煌文書にかかる情報・資料の提供を惜しまない羅の姿勢からすれば、新刊の『三代』も内藤に紹介して然るべきであり、それら資料の提供について羅と内藤の仲介役となった田中も、自身を編集兼発行者とする同著は、当然紹介に及んだと察せられる。仮に内藤が『三代』と説文会との縁を承知の上で如上の批判に及んだとするなら、その矛先は、限られた拓本に依拠するという研究方法に向けられるのみならず、羅との交流を通して資料提供を受けていた同会の姿勢にまで向けられていたことになろう。更に推測を重ねるが、むしろ内藤にとっては、羅と同会との交流の深化に対する苛立ちが先行し、それがこうした批判を生んだのではないか。この点も含め、時に敦煌学の樹立と羅への接近を急速に進めていった内藤に、羅との固有の交わりを持った東京の中国文化界、説文会に対する意識が如何ほど作用していたかは、今後の検討に値する問題であると思われる。

ところで「日記」に掲げられる人士のネットワークについては、計量的な手法も導入するなど、更に精緻な分析が必要とされよう。また、小論では「日記」中の中国人士（例えば同行した范緯君や、清国公使の田呉炤など）については検討が及ばなかった。その分析も以後の課題である。

注

（1）二報とも『大阪朝日新聞』所載。「敦煌石室の発見物」は同月一二日、「敦煌発掘の古書」は同月二四日～二七日。ただし「敦煌石室の発見物」は無名氏の記事。神田喜一郎「敦煌学五十年」（神田『敦煌学五十年』筑摩書房　一九七〇年）は、その筆者を内藤に比定している。

（2）前掲注(1)神田「敦煌学五十年」が、二報を「わが国の敦煌学が始めて呱々の声をあげ」た「第一の歴史的文献」として以降、この神田説が多くの論者に祖述されている。高田時雄編『草創期の敦煌学』（知泉書館　二〇〇二年）所収の本邦初期の敦煌学を論じた各編も参照。

（3）王冀青「羅振玉『敦煌石室書目及発見之原始』版本問題研究」（『敦煌研究』二〇一二年第一期）では、『敦煌石室書目及発見之原始』の刊行は一九〇九年一〇月三日（西暦）とする。『莫高窟石室秘録』は、内藤「敦煌発掘の古書」がそれに依ることから、一一月の中頃までには刊行されていたと推察される。

（4）京都帝大に組織された史学研究会において、その第二回総会の際に併催された（同年一一月二七日～二九日、京都府立図書館）。前掲注(1)神田「敦煌学五十年」参照。

（5）礪波護「羅・王の東渡と敦煌学の創始」（前掲注(2)高田著）、陶徳民「内藤湖南における中国趣味の形成とその影響」（『内藤湖南と清人書画』関西大学出版部　二〇〇九年）等を参照。

（6）同年の春、羅は内藤に向けて、六月頃に北京へ敦煌文書が運び込まれる旨を知らせており、これが京大教授陣の清国派遣の契機となった。内藤「トンコイズム」（『新生』一九二六年七月、『内藤湖南全集』第六巻 筑摩書房　一九七二年再収）を参照。また、高田時雄「内藤湖南と敦煌学」（『東アジア文化交渉研究』別冊三 関西大学 二〇〇八年）も参照。

（7）その経緯は、他ならぬ羅の自伝「集蓼編」（『貞松老人遺稿』甲集 羅福頤排印本 一九四一年、『羅雪堂先生全集』続編 文華出版公司 一九六九年、羅継祖主編『羅振玉学術論著集』第一一集 上海古籍出版社 二〇一〇年）が詳述している。

（8）同著表紙は元来題簽が印刷されないようで、この国会図書館本では「莫高窟石室秘録」と筆写されている（これも古柏艸堂・平子の筆か）。因みにこの本の同館（当時は帝国図書館）受入印には「明治44．7．8購求」とある。

（9）平子の閲歴については、野田允太編「鐸嶺平子尚先生著作年表・略歴」（癸丑会 一九七四年）を参照。平子は明治四四年五月に病没、国会図書館本『莫高窟石室秘録』は、平子の

没後直ちに同館へ渡ったことになる。

(10) 前掲注(7)『羅振玉学術論著集』第一一集所収。羅継祖氏の識語（一九八七年）によれば、この日記の翻刻は、鍾叔河編『走向世界叢書』（岳麓書社）への編入を企図して進められたようである。なお、小論での引用は新字体表記とし、書き下し文に改めた。他の文献からの引用も、漢字は基本的に新字体に改め、適宜句読点を施している。

(11) 甘孺（羅継祖）輯述『永豊郷人行年録 羅振玉年譜』（江蘇人民出版社 一九八〇年、行素堂 一九八六年、中文出版社 一九九〇年）

(12) 例えば杉村邦彦「羅振玉における〝文字之福〟と〝文字之厄〟―京都客寓時代の学問・生活・交友・書法を中心として―」（『書論』第三二号 二〇〇一年）、白須浄真「大谷光瑞と羅振玉―京都における敦煌学の興隆と第3次大谷探検隊―」（前掲注(2)高田編著）、謝崇寧「羅振玉与日本漢学界之関係考述」（『社会科学戦線』二〇〇八年第一二期）など。因みに、京都との結縁以前、特に上海時代の対日関係については、銭鷗「羅振玉・王国維と明治日本学界との出会い―『農学報』・東文学社時代をめぐって―」（『中国文学報』第五五号 一九九七年）を参照。

(13) 初の訪日は一九〇一（光緒二七・明治三四）年冬から翌年春にかけて、高等教育を視察するものだった。その折の日記が「扶桑両月記」（前掲注(7)『羅振玉学術論著集』第一一集）として遺されている。

(14) 「日記」の日付は旧暦を用いているが、小論では便宜的に新暦に変換している。因みに六月二三日（新暦）は、「日記」では五月六日となる。

(15) 「日記」では、当日狩野に会う他、大谷光瑞請来の壁画・仏像を見た旨が記されるが、前掲注(7)羅の自伝によると、羅は本格的な京都避居まで大谷と面識はなかったようである。

(16) 河井の閲歴は、須羽源一「河井荃廬翁の生いたちとその学問」（中田勇次郎編『日本の篆刻』二玄社 一九六六年）を参照。

(17) 徳富が漢籍の蒐集に凝りだしたことには、島田翰の影響があった（徳富『蘇峰自伝』中央公論社 一九三五年）。ただし、ここで羅が河井の仲介で対面したのは、徳富が一方で古印の蒐集にも手を広げていたことに起因しよう。

(18) 田中の閲歴については、自身の半生を述懐した「唐本商の変遷」（反町茂雄編『紙魚の昔がたり』明治大正篇 八木書店 一九九〇年）を参照。

(19) 説文会については、羽澤畔人「説文会小史」（文字倶楽部『文字』四号 一九二〇年）、高田竹山(忠周)「重野成斎と説文会」（『書道』第二巻第二号 一九三三年）などを参照。また、吉金文(字)会については、樋口勇夫「漢字を研究する各種の会合」（樋口『漢字雑話』郁文舎 一九一〇年）に少しく紹介がある。両会の合同開催の例として、高田竹山「唐石刻五経文字」（法書会『書苑』第一巻第二号 一九一一年）を参照。

(20) 前掲注(18)田中の述懐を参照。なお、前掲注(16)須羽の評

伝では、羅が訪中の河井のために定めた「刻印潤例」を掲げている。

(21) 河井が初訪日の羅に随伴した模様については、前掲注(13)「扶桑両月記」を参照。

(22) 前掲注(18)田中の述懐によれば、明治四一年〜四四年まで田中は北京で暮らしていたという。当時日本への帰国がどの程度の割合だったかは不明ながら、羅が北京へ戻り敦煌文書の研究に着手し始めた四二年秋には、田中は北京へ戻っていた。救堂生(田中)「敦煌石室中の典籍」(『燕塵』第二巻第一一号 一九〇九年一一月) 参照。

(23) 島田の閲歴は、高野静子「小伝 鬼才の書誌学者 島田翰」(高野『続 蘇峰とその時代』徳富蘇峰記念館 一九九八年) を参照。

(24) 実は、羅の初訪日の際に、既に河井や日下部が、宮内省図書寮における宸奎閣碑や仏頂光明塔碑等の稀覯な宋拓の収蔵を知らせていた(前掲注(13)「扶桑両月記」)。

(25) 因みにドイツ刊行の且渠安周碑の考証書について、「日記」では原題を記さないが、

Franke Otto, *Eine chinesische Tempelinschrift aus Idikutšahri be Turfan (Turkistan)*, Berlin : königl. Akademie der Wissenschaften.1907

と推測される。羅は同書より、同碑末行の紀年を「泰平三年」と解釈、その発見を「此れ大快事なり」と綴っている。

(26) 服部の京師大学堂招聘時の事跡については、汪婉「清末京師大学堂の創設と日本 (上) (下)」(『共立女子大学総合文化研究所年報』第七・八号 二〇〇一・〇二年) を参照。

(27) 林泰輔はこの年八月から『史学雑誌』に「清国河南省湯陰県発見の亀甲牛骨に就きて」を連載、ただし「日記」には林との対話内容は記されない。羅は林説を受け翌年『殷商貞卜文字考』を著すが、その経緯は、大島利一「竜骨の秘密」(貝塚茂樹編『古代殷帝国』みすず書房 一九五七年) を参照。

(28) この年、早稲田大の理事に就任していた市島謙吉には、当時の日記(その翻刻として、春城日誌研究会「翻刻『春城日誌』(一三) —明治四二年七月〜一二月—」『早稲田大学図書館紀要』第四三号 一九九六年を参照) が遺されており、八月五日の羅の訪問が「九時過羅氏参校、青柳篤恒を通訳として約二時間之談話を試む。皇侃礼記義疏、高麗銀字写経其他図書を示す。羅氏満悦、余に贈るに自書の楹聯并ニ紅霞山房の額面を以てす」などと詳述されている。

(29) 高田『説文捷要』(西東書房 一九〇九年) 補録に「私モ説文段注弁疏ト名ケテ説文ニ関スル書物ヲ編纂シツヽアリマス…唯今三篇ノ上マデ大略起艸…百巻近クニナツテ居リマス」とあり、高田『漢字詳解』巻一 (西東書房 一九〇九年) の前文に「説文段注弁疏ト申スモノヲ起稿スルヤウナコトニナリ…脱稿ハ前途遼遠デアリマス」とある。この稿本は正しくは『説文段注弁疏』のようである。

(30) 前掲注(29)『漢字詳解』巻一前文に「結果トシテ到底三代ノ古銅器古匋器ナドニ刻シテアル所ノ真ノ古文ニ依テ研究セザ

レバ其奥義ハ得ラレナイコトニ心附キマシタ」とある。

(31) 法書会の幹事は磯野於菟介、大口鯛二、岡山高蔭、高田忠周、田中親美、黒木安雄、後藤朝太郎、油谷達、七條愷、樋口勇夫の十名。高田、後藤、樋口といった説文会の面々が揃う。七條は同会本部の事務局を担い、『書苑』の発行兼印刷者も務めた。

(32) 同社の書目『文求堂新古唐本書目』(一九一〇年九月、高田時雄・劉玉才整理『文求堂書目』国家図書館出版社 二〇一五年 翻印) 末尾の「告白」所載。

(33) 羅福頤等撰「貞松老人著述目録」(前掲注(7)『貞松老人遺稿』甲集)、莫栄宗「羅雪堂先生著述年表」(『大陸雑誌』第二五巻 二・三期 一九六二年、前掲注7『羅雪堂先生全集』続編)。

(34) この時期の田中の訪中については、前掲注(22)「敦煌石室中の典籍」を参照。

(35) 内藤の温泉銘の解説については、拙稿「内藤湖南対敦煌拓本『温泉銘』之所見—兼論内藤的交友及其王羲之書法観」(『饒宗頤教授百歳華誕国際学術研討会会議論文集 (三)』香港大学饒宗頤学術館 二〇一五年) を参照。

(36) 実際に書家の反響は少なからずあったようだ。大沢雅休は、「私は太宗については明治四十三年以来、書の事を思ふ毎に片時も忘れ得られぬ…当時郷里の書店に於て七條氏の発行にかゝる「温泉銘」の玻璃版本を一瞥するに及んで始めて「書のよさ」といふものを感得せしめられた」(『書苑』第一巻第六号 三省堂 一九三七年) と回憶する。

(37) 拙稿「博文堂における中国法書の影印出版について」(『中国近現代文化研究』第一六号 二〇一五年) では、内藤の博文堂への関与の他、羅振玉との関係についても論じた。

(38) この年までに同社が影印刊行した中国書跡は、「右軍書記(喪乱帖の刻帖)」、「冥報記」(高山寺蔵)、「画図賛文」(嘉納治兵衛蔵)、「神龍蘭亭」(富岡鉄斎蔵)、「定武蘭亭」(藤田伝三郎蔵) 等となる。前掲注(37)拙稿参照。

(39) ただし、内藤の私家版と見られる敦煌本 (柳公権金剛経) の影印は存在する。『関西大学所蔵 内藤文庫リスト』№3 (関西大学内藤文庫調査特別委員会 一九九五年) には、「柳公権金剛経残巻拓本 坿内藤湖南跋 明治44年(1911)景印 36枚1紙函」なる一著が掲出される (同リスト [802]、筆者未見)。

(40) 『書苑』第二号 (法書会 一九一一年) 附録 (巻末)。

(41) 羅振玉「宋拓東坡宸奎閣碑影本跋」(一九三〇年、羅氏『遼居乙稿』一九三一年石印、『羅雪堂先生全集』初編 文華出版公司 一九六八年)。

(42) 例えば前掲注(12)杉村氏論文、西上実「油谷達と博文堂—そのコロタイプ美術出版について—」(『美術フォーラム21』第二六号 二〇一二年)、伊藤滋「博文堂影印碑法帖拓本考」(『墨』第二二七〜二三一号 二〇一四年) など。

(43) 前掲注(37)拙稿では、羅に窺われる新しい収蔵観・出版観として、影印出版本位で文物売買を加速させる収蔵姿勢、影印出版を前提とした題跋執筆、出版による文物保護・伝承の

強化、などを指摘した。

(44) 明治四三年三月二六日付。『内藤湖南全集』第一四巻（筑摩書房 一九七六年）「書簡」304に翻刻。

(45) 筆名を「言兌生」とする『日本及日本人』第五三一号（一九一〇年四月）のコラムにも当該の「漢字雑話」記事への批判が見られる。内容は、この稲葉宛書簡と同旨で、内藤の筆かと察せられる。樋口はこのコラムに早速反論（「漢字雑話（六十五）」『東京朝日新聞』同年四月二一日）、後述する樋口の内藤への序の寄稿依頼は、「言兌生」を内藤と察知してのことか、興味が持たれる。

(附記) 小論は、JSPS科研費26580023の助成を受けたものである。

（筑波大学）